

## ホームページ

### 一回めの「大英図書館」訪問

収書・整理課 松田裕子

ロンドン市内、地下鉄「キングスクロス・セントパンクラス」駅。ホームから気が遠くなるほど長い階段を上り、地上に出て5分～10分ほど歩くと「大英図書館」に辿り着く。

今年の5月、GWを利用してロンドンを訪れた。旅慣れた友人との個人旅行だったので何処へ行くのも自由。「行きたい場所のリクエストは？」と聞かれ、私わがまま放題にリクエストした場所の一つに、「大英図書館」があった。旅行の計画で、この場所に1215年に発行された『マグナカルタ（大憲章）』の原本があると知り、本物が見てみたいと思ったことがきっかけだった。

実際に訪れた「大英図書館」は、まずその建物の大きさに驚かされた。その手前にある広場（フロントコート）もサッカーができそうなくらいだった。そして中に入ると、今度は吹き抜けのエントランスホールの広さに圧倒された。

ホールの中央まで歩いていくと案内所らしきカウンターがあった。その後方にはガラス張りのタワーがあり、中には貴重そうな本がたくさん並んでいた。タワーを中心として左右には上のフロアへと続く階段があった。下調べもせずに来たため、ここの利用方法も、『マグナカルタ』が何処で展示されているのかもわからなかった。案内所で地図を手に入れても、英語ができないので何が書いてあるのかわからない。とりあえず階段を上ったら展示室があるかもしれないと気楽に考え、向かって左の階段から上ってみると、各フロアに部屋があったがドアには全て鍵がかかっていた。逆側も同じ状態だった。ドアの横にはプレートがあり何か単語が記されていた。それを見な

がら、これらの部屋はきっと閲覧室なのだろうと思った。今日は休館日だったのかと残念に思いながら館内を歩き回っていると、友人が「夕方のサッカーの試合のチケットを買いにいつてくるから、また後で連絡する。」と言って、図書館を出て行ってしまった。一人で残された私は、まだ見ていない下のフロアに向かった。すると、一番下の階で左の奥の方に暗い部屋があることに気がついた。入ってはいけな部屋なら職員さんが教えてくれるだろうと思い、とりあえずその部屋の中へ入ってみることにした。

部屋の中には、ガラスケースに納められた本がたくさん展示されていた。古い時代のイギリスを描いた地図、きれいな絵が描かれた聖書…。すぐにその部屋が展示室だとわかった。本命の『マグナカルタ』の姿は見当たらなかったが、他の展示物を見ながら探すことにした。展示物ごとに簡単な説明がついていたが、残念ながら全て英語のため読めなかった。だが、色々見て回っている内にグーテンベルク聖書やモーツァルトの直筆楽譜など、私でもわかるような物を数点見つけることができた。そして出口が近づいてきた時、壁際に小部屋があることに気付いた。明らかに特別扱いとわかる展示部屋の中に入ってみると、『マグナカルタ』がそこにあった。『マグナカルタ』の原本は、とてもきれいな状態で展示されていた。どんな経緯でその憲法が生まれたのか、わかりやすいように年表と一緒に掲示されていた。英語がわからないながらも、じっくりと端のほうから見ていこうとしたその時、携帯にメールの着信がきた。友人からだ。まだここにいたい気持ちでいっぱいだったが、待ち合わせの場所へ向かった。

帰国してから、ホールのタワーは王立文庫といってジョージ3世の蔵書が納められていたこと、やはり訪れた日は休館日であったこと、閲覧室を利用するためには許可がいること、

展示室には本当に貴重な資料があったことなど多くのことを知った。次に訪れるときは『マグナカルタ』だけではなく、もっと色々な「大英図書館」を楽しみたいと思う。



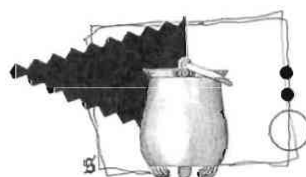
大英図書館



エントランスホール



王立文庫



カット 理工学部教授 楠田 一夫